

Coexistence of bone and vascular disturbances in patients with endogenous glucocorticoid excess

矢野（井上），千絵子

<https://hdl.handle.net/2324/7157303>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : Creative Commons Attribution 4.0 International

氏名： 矢野（井上） 千絵子

論文名： Coexistence of bone and vascular disturbances in patients with endogenous glucocorticoid excess

(内因性グルココルチコイド過剰症患者における骨と血管障害の併存)

区分： 甲

論文内容の要旨

目的 骨疾患と血管疾患は共通の発症メカニズムを持つと考えられている。過剰なグルココルチコイドは、心血管系と代謝系の恒常性の重要な調節因子であり、両疾患を同時に促進する可能性がある。我々は骨と血管の疾患が併存する背景にグルココルチコイドの過剰があるかどうかを、内因性クッシング症候群（CS）を用い、グルココルチコイド過剰が骨・血管疾患の併存の根底にあるかどうかを検討した。

方法 副腎腫瘍（AT）患者194名を対象とした：自律的なコルチゾール分泌（ACS、n=97）および非機能性AT（n=97）である。ACSはさらに、顕性CS（n=17）と不顕性CS（SCS、n=80）に分類された。動脈硬化は上腕足首間脈波伝播速度（baPWV） $\geq 1,800$ cm/sと定義した。

結果 ACS患者では、椎体骨折と動脈硬化の併存率（23% vs. 2%、 $p < 0.001$ ）、椎体骨折と腹部大動脈石灰化（22% vs. 1%、 $p < 0.001$ ）の併存率が高値であった。ロジスティック回帰分析では、ACS患者は、baPWVは海綿骨スコア（TBS、 $r = -0.33$ 、 $p = 0.002$ ）と負の相関があったが、骨密度とは相関がなく、椎体骨折は動脈硬化と相関があった。多変量分散分析では、グルココルチコイド過剰の程度（CS、SCS、および非機能性ATと定義される）が、TBSと動脈硬化（baPWV）の相関を決定した（partial $\eta^2 = 0.07$ 、 $p < 0.001$ ）。共分散分析では、椎体骨折と動脈硬化が併存している患者は、そうでない患者に比べて、1mgデキサメタゾン抑制試験後の血清コルチゾールが高値であった。

結論 内因性グルココルチコイド過剰症では、骨および血管疾患が併存していることが多く、骨量減少ではなく骨質悪化が動脈硬化と関連していた。したがって、グルココルチコイド過剰は、骨-血管軸を乱す可能性がある。